

安田女子大学大学院紀要 第25集
日本語学日本文学専攻

宮本 輝「ホット・コーラ」論

藤 村 猛

要 旨

宮本輝の「ホット・コーラ」は、喫茶店〈アトラス〉の須藤英夫と奇妙な女性客との物語である。ある日、喫茶店に一人の女性客が訪れ、ホット・コーラを注文する。英男は彼女に好意（妄想）を持つが、他の客たちは、彼女が精神病院の患者だと噂する。実は、近くに住む息子を見るためにやって来ていた。それを突き止めた英男は、店の営業のために、女性客の来店を諦める。英男の心情―商売の苦悩や人生への不満、女性客への好意など―や、人目を避けて会う母子の姿も印象的だが、英男の女性客への好意や交流が一方的で深まらない点に、作品の特徴と限界（弱さ）がある

キーワード

喫茶店・ホットコーラ・精神病院・母子の交流

一 はじめに

「ホット・コーラ」（『小説新潮』1987年10月号）は、喫茶店〈アトラス〉の主人・須藤英夫と一人の女性客との物語である。英男ははやらない喫茶店の主人で、店に来た女性客の注文したホット・コーラに驚きながらも、彼女に惹きつけられていく。その後、彼女は、近所の家に住む小学生（息子）に会いに来ていることが分かる。が、好奇心の強い常連客たち（男たち）のせいで、好奇の目や噂の対象になることに耐えられず、彼女は店にやってこなくなるだろう。しかし、店の経営のため、英男はそれを受け入れざるを得ないと苦悩して、作品は終わる。

三十歳の中年男の心情―商売の苦悩や人生（結婚）への不満、そして、女性客への好意や妄想―が巧みに描かれていて、人目を避けて会う母子の姿にも好感が持てる。文庫本の解説者・饗庭孝男氏が言うように、「母子についての同情が作品の底に漂っている¹⁾」し、安藤始氏が言うように、英男は「宮本輝の好んで描く、人生の希望

を捨てることのない良心的な人物のひとり」である。⁽²⁾

だが、二人（英男と女性客）は、喫茶店のマスターと客との関係にすぎず、女性客への思いも英男の一方的なものでしかなく、それ以上の交流はない。⁽³⁾その結果、同時期の「暑い道」（1987・7）や「真夏の犬」（1988・5）などと比べると、人間関係としてのドラマ性が弱く、人間の奥底まで描いているとは言えず、作品としての深みがないという欠点がある。

須藤英男の心情や言動に注目して、作品の特徴を考える。

二 喫茶店（アトラス）と女性客

英男の経営する喫茶店（アトラス）は、大阪近郊の新興住宅地の一角にあった。近くには小学校と幼稚園があり、店の裏手の川の対岸に精神病院があった。が、住民の多くは「二時間近くかけて、大阪や神戸に勤めに出る若い夫婦者だった」ので、店は「まったくはやらなかった」⁽⁵⁰⁵⁾。英男は「なんとか客を得ようとして、さまざまな工夫を凝らし」た。例えば「サラダとトースト付きの珈琲を早朝サービス」にするなどが、客は増えず、開店三ヶ月で「土地と建物を担保に銀行から金を借り」て、商売替えをしようかと考えるようになった。そのとき、「住宅地の北のはずれに、蒲鉾工場が移転してくるのが決まり、（アトラス）と通りをへだてた斜め向かいに」⁽⁵⁰⁵⁾、女子寮ができることになった。それを励みに、英男は店の経営に努めていた。

そして、二ヶ月前に女子寮ができ、「五十数人の若い女子社員た

ちが引越して」くる。しかし、近所に若い女性好みの喫茶店——「（アトラス）よりも三倍広い大きさで、高原のペンション風の建物」⁽⁵⁰⁶⁾——が開店したため、英男の妻の仲子はひどくがっかりし、「せめて、ローンの返済額の半分でも、自分で稼ぎたい」と、「親戚の電気工事店に勤めだ」す。それでも、女子寮のお陰で、「月の売り上げは三割がた増えていた。」

また、蒲鉾工場移転の関係で、技師三人と工場主任が土曜と日曜日の朝の十時にやって来て、店の奥の席に陣取り、店に居続けて、競馬の「ノミ行為」をするようになった。英男にとっては「ありがたい客ではなかった」⁽⁵⁰⁷⁾が、工場主任曰く、「工場が移転してきたら、うちの社員で満員になるさかい、マスター、よろしゅうたのんまっせ」⁽⁵⁾とのことであつた。英男は、主任の「言葉を最後の依りどころみたいに感じて」、店の経営を頑張っていた。

そういう「八月の半ばの土曜日、ひとりの女客が（アトラス）にやって来て、「入口に近いテーブルに坐った。」（実は、彼女は、（アトラス）の近くの家に住む息子を見に来たのだが、それは英男にはまだ分らなかった。）

女の客は、美人の部類に属するだけでなく、着ているものや、全体から漂うものに気品があつた。三十二、三歳で、薄化粧のせいもあるが顔色は青味がかつて見えるほど白かつた。

⁽⁵⁰⁷⁾問題は、彼女が「ホット・コーラ」を注文したことである。注文を受けて、英男は「はっ？」と言ひ、「もう一度訊いた。」女は「ホット・コーラです」と言ひ、「臆した様子も、恥じらいの色も見せ

ず英男を見つめた。「とつさに、英男は川向こうに精神病院があることを思い、できるだけ平静を装」う。店内にいた四人組も、「英男と同じことを思ったらしく、ぎこちなく馬の話に戻」(508)る。女のホット・コーラという注文を聞いて、英男たちは動揺したのである。(昭和50年ころにはすでに、大坂市内でホットコーラを出す喫茶店はあつた⁽⁶⁾が、大阪近郊では珍しいものだったのだろう。)

三 ホットコーラと英男

英男はコーラを温めて、ホット・コーラを作った。彼はそれを女性客に運び、残ったコーラを飲んで、その甘味に哀しくなる。

夫婦で苦労して、やっと手に入れた家と店舗だが、もうあきらめて手放そう。そして、どこか就職口を捜そう。客商売は場所がすべてだというのが、まったくそのとおりだ。こんなところで喫茶店を営もうと考えた自分は、世の中のことなど何も知ってはいなかった。要するに、自分は馬鹿なのだ。(中略)あの、若い女の趣味に合わせた薄緑色のペンション風の喫茶店は、店内も凝った造りで、自家製のケーキも置いてある。それに比べて俺の店は、趣味の良くない壁紙と窮屈なテーブルの配置で、そのうえ馬券狂いの常連と、ホット・コーラなんかを注文する気味の悪い女客だ。こんな客がもう二、三人も増えたら、誰も俺の店に寄りつかなくなる……。 (509)

このように英男は悩むが、女性客は「ホット・コーラを半分ほど飲み、通りに面したガラス窓に凭れるようにして物思いにふけて

いるみたいだったが、三十分ほど出て行」(509)く。店にいた常連客の四人も、ホット・コーラを奇妙なものとして受けておいて、女性客が帰った後、「カウンターに席を移し、口々に英男に話しかけ」る。

「ホット・コーラ! わし、そんな初めて聞いたで」

「俺、飲みかけた水を噴き出しそうになったなア」

「マスター、あの客、初めての客やろ?」

「どう見ても、頭がおかしいようには見えんけどなア……」

そのうち四人は笑いだし、ホット・コーラやて、ホット・コーラやて、と互いに肩を叩き合つて奇声をあげた。

「軽症の患者で、ときどき外出許可をもらえんやろ」

技師のひとりが、土手の向こうを指さして言った。(510)

こうして、女性客は精神病院の患者とされる。だが、その夜、英男は風呂に入り、「女客の横顔」を思い浮かべ、彼女が「精神病院の患者」という見方に疑問を持つ。それは、彼女の「全体から漂うものに気品があ」(507)り、彼女の「清潔感」に好感を持ったためである。

自分も、四人組も、てっきり精神病院の患者だと決めつけているが、温めたコーラを注文したからといって、そう安直に即断するのは間違っているような気がした。案外、自分たちの知らないところで、ホット・コーラなる飲み物が流行しているやもしれず、コーラは冷やして飲まなければならないという法律があるわけでもない。いろんな人間がいて、いろんな嗜好があり、あの女性はコーラを温めて飲むのが好きなのだ。英男にそ

う思わせたのは、女の持つ清潔感が、これまで接したことのない種類に属していて、英男の心に焼きついてしまったからである。(510)

英男が思うように、ホットコーラは大阪市内の一部の喫茶店では飲まれていたのである。そして、女が「英男の心に焼きついてしまった」理由の一つとして、彼のそれまでの恋愛と結婚の平凡さがあった。英男と伸子は夜間高校の同級生であり、高校を卒業して四年後に、二人は見合いをする。そして、「夫婦は釣り合いのとれているのがいちばんええ」という父や知人の言葉に従い、英男は結婚したのであり、伸子に強い愛情がある訳ではなかった。その後、七年間、夫婦には子供がでなかった。

彼は風呂から上がり、「自分は、つまらない人生をおくっているな……。」と思う。伸子と女性客を比較したのだろう。彼は、「どんなにおしゃれをしてもいなか臭さが残る」伸子の顔を盗み見ながら、

自分たちは、いつも烈しくなかった。自分たちの生活同様、愛情もその表し方も、切り詰めて切り詰めて、たまにはめを外すことすらしなかった。そう思うと、英男は、にわかに伸子とうとましく感じた。(511)

だから、伸子が「風呂場に近寄って」、「毎月の売り上げ、ちょっとずつ増えてきたねえ」と言っても、「その、ちょっとずつという幸福の種すら、英男には、貧乏臭さといなか臭さの象徴のように思」(512) ってしまう。女性客の存在によって、英男は伸子との距離を生じさせている。だが、「たまにはめを外すことすらしなかつ

た」のは、伸子のせいかもしれないが、英男自身である。

四 女性客と子ども

その後も、「女は、火曜日と木曜日、それに土曜日に〈アトラス〉にやってくるようになった。」

そして、必ずホット・コーラを注文する。店に入ってくるのが午後二時を少し廻った時分で、三時を過ぎるまでいることはない。たいてい、二時四十分ごろに代金をテーブルの上に置いて出て行くのだった。ぼつねんとガラス窓から路上を眺めている日もあれば、本を読んでいる日もあった。(512)

当然のことながら、女は常連客(男)たちの関心の的になる。彼女が精神病院から出て来たとのことで患者とされるが、やはり、英男は合点がいけない。患者が定期的に一人で外出することは考えにくいし、しかも、彼女は指にダイヤの指輪をはめている。工場主任も「俺には、頭のネジがどこか外れた人間には見えんなア」(513)と言う。精神病院へは見舞いで出入りすることもあろうし、(前述したように)、英男たちは知らないにしても、大阪市内の一部の喫茶店ではホット・コーラを出していたのである。

それでは、女は何の為にやってくるのか。英男は女の見えるもの(視線)に注目する。彼女は、常に店の入口近くの席に坐り、店外を見ることがある。英男は彼女の座る席に坐り、窓から外を眺め、道の向こうの家々を見る。向かいの家から六軒目の家の風情が、「英男の心に引つか」(514)る。無人の家のようにで玄閑に雑草がは

びこっているのに、二階の窓は開けはなれていて。この窓に、英男は注目する。

英男は、やがて、その二階の窓に、近づいたり離れたたりする人影を認めて目を凝らした。それは、中学生になるかならないかの年頃の少年であつた。少年が、ときおり窓に近づくと、き、あきらかに視線は〈アトラス〉の入口の横にあるガラス窓に注がれた。(514)

どうして、英男がそこまで詮索するかと言うと、女は「たとえ心を病んでいたとしても、それはそれで女の特異な魅力として、英男を酔わせ」ていたからであり、女と週に三日会うことで、彼は「日を追って、自分もおかしくなったように感じ」ていた。即ち、彼は想像の中で、疑似恋愛（妄想）を行っていたのである。彼は女に対して「かつてない想像力」で、「他愛ない恋愛⁷劇」（515）を「次から次へと組み立て」、やがて性的妄想（女との営み⁸）を持つようになっていた。このように、女は単なる女性客ではなかったのである。

夕方、〈アトラス〉の真向かいの家の佐藤夫妻が店に来たので、英男は六軒目の家のことを聞く。彼らは、それは安藤さんの家で、「七十四歳の祖母と、小学校六年生の孫の二人暮らし」（516）だと言う。英男は、その子どもと女に何らかの関係があると推測し、女が来る前に、女がいつも坐る席の椅子を外しておいた。

翌日やって来た女は、いつも坐る席に執着して、英男に椅子を持って来させて坐った。「英男は自分の勘が当たって、なぜか体が熱くなった。」(517) 女の秘密を知ること、彼女との距離がより近く

感じられたのであろう。（彼の妄想の中では、彼女とは既に恋人同士である。）

女は本のページをめくって、そこに目を落としたが、二、三分もすると、視線を安藤家の二階に移し、それからゆっくり路上を見つめた。(518)

英男は入り口の取っ手を磨くふりをして、「女と安藤家の二階の窓」を見ていた。十分間、何も起こらず、「勘ぐりすぎだったかな」と英男は思い、カウンターに入り、店の裏口に行った。帰って来ると、

女の目が斜め上に注がれて動かなかった。（中略）少年が窓辺に立って、女を一心に見ていた。やがて少年は、ひらがなを一字だけ書いた画用紙を両手でかざした。〈き〉という字であつた。少年の姿は消えたが、すぐにあらわれた。そのたびに、両手でかざす画用紙の文字は変わった。

〈きょうのおかずははんばあく〉

十三回、画用紙をかざしたあと、少年は胸元で小さく手を振り、窓辺から去った。そして、サッカーのボールを持って玄関から走り出、小学校の校庭の方角に、あとも見ずに駆けて行った。(518)

おそらく、少年と女は親子であろう。何らかの理由で堂々と会うことが出来ないの、週に三回、人目につかないように二人は視線を交わし、少年は画用紙に文字を書き、「近況報告」をしていたのである。

少年がいなくなつて、女は店を出て行った。そのとき、英男は

「まいどありがとうございます」と、「うわずった声で言って、ドアをあけてや」った。英男は、母子の交流に感動を覚えたのであるう。

その直後、「蒲鉾工場の四人組が、別の社員たちを連れて」やって来た。ホット・コーラを飲む女が「作り話」(519) かどうかを、確かめにやって来たのである。店は開店して、初めて満席になった。

一人の社員が「よし、どんな味か、俺がいつべん試したる」と、ホット・コーラを頼み、出来あがつたホット・コーラを飲んだ。彼が「うまい。これ、いけるで」と真顔で言うのと、「嘘つけ！ うまいはずがあるかいな」と、「みんなは廻し飲みした。」(519) 他の連中は「一口で顔をしかめ」たり、「念入りに味わ」ったりしたが、「うまいという者」は、他にはいなかった。

英男は、来週もこの連中がやって来て騒々しく女に注目したら、女は他人の目を嫌って、ここには「足をはこばなくなる」と思う。

そうすれば、一緒に暮らせない母のための、少年の一枚一枚ひらがなを書きつけた画用紙による近況報告も終わらざるを得ないだろう。(中略) 彼は、女と少年の、つかのまの交流を邪魔しないでやってくると、何度、蒲鉾工場の社員たちに言おうとしたかしない。けれども、英男はそれを口にすることはできなかった。工場主任は、約束どおり、自分の同僚や部下たちを〈アトラス〉に連れて来てくれた。この客たちを得ることと、ひとりの女客を失うこととは比較にならないからである。そんな自分の計算を情けなく思いながら、彼は、八人前のドラ

イカレーと五人前のスパゲッティを作り続けた。(520)

工場主任は客を連れてくるとの約束を守ったが、それは女の来店を終わらせることに通じる。英男は、ひそやかな母子の交流が終わると良心が痛みながらも、商売(生活)のことを優先させて、やがて来るだろう、女と少年の交流の終了(女の来店の終了)を受け入れる。

しかし考えてみれば、少年は家に閉じ込められているのではなく、家を出て野球に行くように、外出できるのである。「画用紙による近況報告」の如き交流は、女が〈アトラス〉に来なくても、工夫次第で今後も可能であろう。英男は、女が自分の店に来て、子どもとの交流を行ってほしいのである。母子への同情もあるが、その底には、女と会いたいとの思いがある。そして、女よりも常連客を選ぶ「自分の計算を情けなく思」うあたりに、彼の人の良さが表れている。

五 英男の思い

以上のように、英男は女と会うことをあきらめるが、元々彼は、「心を病んでいた」女に「特殊な魅力」(515)を感じ、性的妄想を抱いていた。だが、彼は母子の交流の場に出会い感動して、女性(母性)の良さも実感している。それでは、彼には性的欲望はなくなったのか。つまり、母子の愛情にうたれて、性的欲望がなくなったのか。それとも、自分には美しい女性との縁がないと諦めたのか。

それは、作品の最終場面での英男と伸子の会話から、ある程度推

測できる。

夜、英男はきょうの売り上げ伝票を伸子に見せ、

「俺は、お前にとって、愛する亭主か？」と訊いた。愛という言葉は口にしたのは初めてだったので、彼はそれを言うとき、畳の目を爪でかいた。

「当たり前やろ？ 急に、どうしたん？」

伸子は、英男の顔を覗き込むと、あんたはどうかと訊き返してきた。

「何が？」

「私は、あんたにとって、愛する女房か？」

英男は、畳の上に寝そべり、

「当たり前や」と答え、蒲鉾工場の社員たちが客として定着したら、勤めを辞めて店を手伝ってくれと言った。(521)

結婚後七年経って、「愛という言葉は口にしたのは初めて」にも驚くが、二人の会話中の問い（「愛する亭主か？」・「愛する女房か？」）と、答（「当たり前やろ」・「当たり前」）はいささか唐突すぎて、違和感がある。が、女性客との別れが、英男の妻への愛情告白に到らしめたのであろう。（少なくとも、後押ししよう。）

伸子との仲を、「切り詰めて切り詰めて」いたのは英男自身であった。だから、英男は、ホットコーラを注文する不可解な美人の女性客に、性的妄想を抱いたのである。つまり、彼は女性客によって、「愛情」や「その表し方」に、想像上ではあるが、「烈しさ」を得たのである。今後は、伸子との関係に、それらが持ち込まれるのかもしれない。だが、それは、女性客に抱いたような、奔放なもの

ではないだろう。彼が「愛という言葉」を伸子に言ったとき、彼は「畳の目を爪でかいた」。彼はやはり、小さな男なのである。しかし、伸子の英男への愛情表明は即座であった。英男は安心したのではないか。

英男の妻との「愛」の確認は、女性客が去ることや性的妄想の代償であるとしても、そこには妻との新しい生活への願望があり、女性客への性的欲望（妄想）は、一応は終了したと言っている。

しかし、去っていった女への英男の思いが、すぐになくなるとは思われない。母子の情への思い（同情や感動）とともに、ミステリアスな女への思いは残っていくだろう。

突然店に来て、ホットコーラを飲み、子供とひそかに会い、また来なくなる女性客。彼女を見て好意や妄想を抱く中年男。この作品は、会えない息子を見る女（母）、その感動的な場面を見る男（英男）、という構図の中で展開している。だが、男女の交流が母子のそれほど深くない。即ち、二人（英男と女性客）の出会いが突然始まり、深まらずに終わる点に、この作品の特徴と限界（弱さ）がある。だが、英男と伸子の最終場面での和解（告白）に、明るいものを感じさせるのも事実である。

（注）

（1）引用は、文春文庫『真夏の犬』（1993・中）による。

（2）引用は、安藤始『宿命と永遠―宮本輝の物語―』（おうふう 2003・

110) による。

- (3) 注2の「良心的な人物」は、「夢見通りの人々」(1982・9～1985・11)の里見春太をはじめ、宮本輝の小説にはよく登場している。ただし、英男は、春太のように他者のために働くという種の人間ではない。
- (4) 本文の引用は、『宮本輝全集』13(新潮社 1983・4)による。()内の数字は、全集のページ数である。

- (5) 後に、「工場主任は、約束どおり、自分の同僚や部下たちを(アトラス)に連れて来てくれ」(520)る。

- (6) 現在でも、ホット・コーラを出す店は大阪や名古屋などにあり、風邪対策としてのホット・コーラは知られている。だが、筆者(藤村)の個人的感覚を言えば、ホットコーラは甘すぎて、美味しいものとは思われない。

- (7) 本文では、その一例が次のように描かれる。

英男と女は、列車に乗って海沿いの鉄路を進んで行く。女が気分の悪さを訴える。大丈夫だ、しばらくしたら治るよと英男が温かい目でささやく。駅に降りると、涼風がプラットホームの樹木をそよがせ、親切そうな駅員が切符を受け取る。女が、日傘を買いたいと言う。買った日傘をさして、英男と女は静まり返った古い家並の道を歩いて行く……。(515)

次に描かれる肉体がらみの妄想に比べれば、とりとめのない、情緒的な空想である。

- (8) 宮本輝のこの時期の短編小説に、妄想とはいえ、女性との性的な描写があるのは珍しく、他には「暑い道」(1987・7)くらいである。(ただし、性的なものを暗示させる作品としては、「真夏の犬」(1988・5)や「力道山の弟」(1989・3)などがある。)

「ホット・コーラ」と「暑い道」の違いとして、「暑い道」では、現実の性的描写が生々しく、かつ、情緒的に描かれ、性が主人公たちを動かすのに対して、「ホット・コーラ」の方は、主人公の一方的な妄想にすぎず、他者(や自分)を動かすような力を持っていない。